

保育現場からの表現活動（造形活動）についての 質問状とその回答および考察

— 羽島市保育会の質問状より —

若 杉 雅 夫 (表現)

はじめに

平成11年度の6月・9月・12月に羽島市内の保育所11園（保育士130名）が加盟する羽島市保育会の保育研究会講師として、公開保育に関する助言および質問状への回答形式の講演を行った。

保育研究会の具体的な内容としては、先ず3・4・5歳児の各保育室などにおける表現活動についての公開保育と公開保育を担当した保育士を中心としたディスカッション、その後講師の助言と公開保育とは別枠の各保育所からの質問状にたいして、講師が回答形式の講演を行う構成となっている。おおよそ3時間に渡って熱心な研究会が毎回繰り広げられた。その中でも年齢に応じて行われる公開保育は私自身大変興味深く、また現在進行形の保育現場における表現（造形活動）の現状把握にも貴重な経験であったと考えている。また質問状については、現在保育士の方々が造形遊びの援助・指導のあり方について現実に疑問を感じている点や、分からないことなど多義に渡っており、回答をレジュメにする過程で生の現場の真摯な声を聞き、身を律せられる思いであった。

本稿では、前述の保育研究会のなかで表現活動の絵画製作における援助・指導について保育士の方々から寄せられた公開質問状と質問状に対する私の回答を中心に、よりよい保育に向かうための表現（絵画製作）のあり方について考察する。

質問は、各研究会（年3回）毎に3～4項目、延べ10問に渡った。以降各研究会に区切って実際の質問を提示し論考する。

第一回保育研究会（99年6月8日）

会場：桑原保育園

質問－1（正木保育園）

絵を描く前の言葉掛けや導入の仕方を教えてほしい（例えば、お母さんの絵や運動会の絵など）。また絵を描いている途中にどの程度言葉掛けが必要か。

回答及び考察

絵の製作活動については、表現活動の三系論（林建造「表現過程における三系論」）において、製作過程の筋道（想像の系－技術の系－伝達の系）で分かりやすく表されていると考える。質問－1は絵を描く前の言葉掛けと、製作過程での援助・指導の二つの問題がある。先ず前者については、三系論の想像の系に当てはまる事例であろう。言わば活動の導入部分に当たり、この段階での言葉掛けや指導の仕方に拠っては子供の自発的な表現の広がりを促す事が出来なくなり、画一的な表現に陥りやすくなる。回答としては、質問に書かれている「お母さんの絵」を取り上げ、先ず子供の母親に対するイメージを引き出すことが最も大切なこととした。その為の言葉掛けとしては、日常生活での母親との接点を具体的に語りかけることが必要であり、その例としては「どんな時のお母さんが好き？」「お母さんの好きなものは？」「朝御飯何作ってくれた？」「お母さんとどんな遊びする？」などを挙げた。ここでは、子供がそれぞれの母親を頭のなかに鮮明に思い浮かべられるような言葉掛けを心掛ける必要があり、また可能であれば一人一人に言葉掛けすることが望ましい。個々の子供との対話の中か

ら、その子らしい具体的イメージを導く事が出来ると考える。(図-1、図-2)

次に製作過程での援助・指導については、保育者の言葉を聞き広がったイメージを画面に定着する段階であるが、ここでは描き方や構図などの指導を極力控えることが必要である。指導が強すぎると子供の表現意欲が萎縮される傾向が多々見受けられる。先ず心掛けねばならないことは、思い浮かんだ子供のイメージを大切にし、個々の表現のあり方を受入れ、励ましや褒め言葉で製作意欲を高めることであろう。そうした保育者の姿勢が、伸び伸びとした自己表現を助長し、自発的な表現活動を引き出し創造力を養うこととなる。私自身「お母さんの絵・お父さんの絵」とはよく出会うが、多くの子供が画面一杯に正面から同じくらの大きさで対象を表現している。これはそのような表現が是であるという意識が大人の中に内在し、その価値観を無意識に子供にも求めている結果ではないかと危惧している。子供の絵は、心の言葉を綴ったメッセージである。それは作品でもなく、評価の対象でもないのである。大人目からみて良い絵を子供に押し付けてはならない。その子の目で、その子らしい率直な表現になっていることが最も重要なことである。もちろんこの段階での保育者によるクレヨン・クレパス・絵の具などの使用に関する援助や指導は、子供の表現活動を円滑に進めるためにもその適齢に応じて行う必要がある。

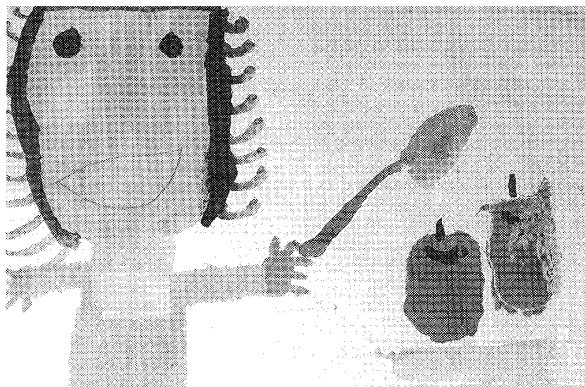


図-1 五歳(女) 食事を作る母親の姿が生き生きと描かれている

質問-2 (足近保育園)

子供が絵を描くときに、形のとらえられない子にたいしてどのような指導をしたらよいか。例えば、お母さんの絵を描くとき、導入としてお母さんについて楽しい話をしたり、具体的に顔や髪形について話したりするが、それでも形のとらえられない子に対して、どのように指導・援助したらよいか。

回答および考察

形が捕らえられない子供に対しての指導・援助についての質問であるが、この問いについては、保育者のみならず母親からもよく受ける質問・戸惑いである。しかし、形が描けないという問題のなかには、様々な理由・原因があると考えられる。以後その原因と対応について記述する。

先ずよく見受けられる原因としては、具体的な形を表す適齢でない点や描画経験の不足などが挙げられる。子供の成長に個人差があるように、形を表すようになる時期も様々である。まだその適齢に達していない子どもに具体的な形を要求したり、教え込むのは適切ではない。この場合「ぬたくり」や「絵描き遊び」など造形遊びを十分に体験させることで、次の段階に進む準備もでき、合わせて描画経験の不足も満たされることとなる。次のケースとしては、子供の中には頭のなかに思い描いたイメージを形として表すことを苦手としている子もいる。しかしその子供の言葉をよく聞いて



図-2 五歳(女) 大好きなお父さんを花のイメージで表現

みると、たとえ形になっていなくても、思い描いた母親のイメージを一心に線や色で表現している場合が多く見受けられる。ここで大切なことは、結果にこだわることなく子供の表現を理解し受け止めようとする保育者の姿勢である。また、身の回りの環境から形に対する感受性を高めることも大切である。例えば普段の会話の中で「あっ、面白い形の雲。何に見える？」と、雲や小石や木の枝などで形見つけをすると、連想する力が養われ、それがイメージを具体的な形に導く手助けともなる。最後に、これは設定保育の問題点であるが、決められた活動時間内では、自身のイメージを形にできないマイペースな子供もクラスの中にはいるはずである。この場合設定時間に縛られることなく、個々の活動を考えてそれなりの時間を保育者が確保する必要がある。(図-3、図-4)

以上具体的な形が表現できないケースとその対応について述べたが、いずれも保育者の柔軟な援助と個々の子供の表現を愛情を持って受け入れる姿勢によって、解決されるものと思われる。くれぐれも大人側の価値観である程度の結果を期待し、想定してしまうことなく、子供の視線にたって有りのままの子供の表現を受け止め、辛抱強く援助・指導していくことが大切であろう。

質問-3 (小熊保育園)

3・4・5歳児共通して言えることだが、絵を描くことに抵抗なく楽しく取り組んで

いるが、人真似をする子供が多いので個性のない絵(作品)になってしまう。保育士は体験や話し合いを多くもって描かせるようにしているが、相変わらず同じ状態なので、どのようにしたらよいか。

回答および考察

画一的表現になってしまう原因としては、指導が強すぎるために自主性が育まれない点が先ず挙げられる。特に日本人は民族的な性癖として横並び意識が強く、子供にもその影響が現れ、画一的表現に陥り易い傾向にあると言っているだろう。そのため表現活動においては、子供それぞれの想像力をいかに引出し、自主的で独自性ある表現に繋げるかが重要となってくる。しかし実際の幼・保園の表現活動を見ると、子供の主体性を培う内容とは言えないケースも少なからず見受けられる。私自身経験した画一的表現としては、保育者の指導によって雄雛・雌雛を折り紙で作りそれを画用紙に貼った後、その上を子供たちが加筆する活動や、雪だるまなどの形を保育者が予め描いておいた上に表現された絵など、特に行事や季節の絵に関してその傾向が強いようだ。ここには、幼い子供を手助けしようとする保育者の親心がある。さらに行事の作品としての分かりやすさを求める余り、手を掛けすぎてしまう結果主義的な姿勢も垣間見られる。しかし、このような造形活動では、イメージを発想する大切な段階を子供たちから奪ってしまうことになり、想像



図-3 三歳(女) むたくり

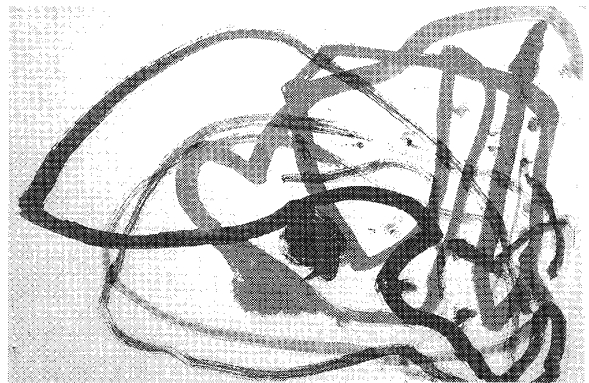


図-4 絵描き遊び(ジェットコースターの線)

力を養うことが出来ないばかりか、依頼心の強い柔軟性に欠ける子供にしてしまう危険性がある。その結果造形活動に自信が無く、つい人真似をしてしまう一因にもなっていると考えられる。

回答としては、先ず経験や物を描く以前に様々な造形遊び(デカルコマニー・ドリッピング・パチック・ローラー遊び・スタンピング・絵描き遊びなど)を適齢に応じて体験させる必要があるとした。造形遊びを楽しむ中で自然に自主性や形に捕らわれない自由な表現力を身につけることが出来、個々の個性も育まれていく。また、経験や物を描く具体的表現の場合も結果主義(作品主義)に傾くことなく、子供が素直な気持ちで表現できるような援助を心掛けねばならない。

次に表現活動の過程で常套手段のように使われる「上手」という言葉掛けについてであるが、この言葉には何ら子供個々の情緒的感性に訴えかける内容が無く、却って画一性を誘発してしまう。画一性を誘発してしまう日常的具体的例としては、保育者の評価の基準に合った子供の絵を取り上げ「花子ちゃんの絵見てごらん、とても上手に描けているね。」と子供たちに見せることである。ここでの問題は、保育者が「上手」という言葉を使って一人の絵を提示することによって自信を無くす子もいれば、あんなふうに絵を描けば先生に褒められると、密かにその表現を真似する子供も必ずいるはずである。子供は褒め言葉に敏感であり、自他の区別なく「上手」という言葉掛けをされた表現に呪縛される。保育者は子供それぞれに適した褒め言葉を考えるべきである。

以上、自分らしい個性的表現を促す為には、どのような造形活動を設定し、どう子供と接していくかを述べた。表現活動で心掛けねばならない最も大切なことは、子供の創造の自由を確保し、一人一人の表現のあり方を受け止める保育者の姿勢にある。

第二回保育研究会(99年9月9日)

会場：足近保育園

質問-1(竹鼻保育園・正木南部保育園)

色のとらえ方について、保育士が固定概念に捕らわれやすいのだが、子供たちの発達段階に応じた指導・援助はどのようにしたらよいか。以前は、子供が色づくりをしていたが、色遊びになってしまったり、時間がかかりすぎたりし、また、単色使いの場合が多かったので、今は保育士が色づくりをしている。子供が色づくりしたほうがよいのか。

回答および考察

質問-1については実際は二問に分かれていたが、内容がいずれも色についての指導・援助に関する問いであり、切り離して述べる必要がないため纏めることとした。研究会においても合わせて回答した。

色のとらえ方(色彩表現)については、一般的に大人は固有色(髪-黒・顔-肌色・樹木-茶と緑など)にこだわる傾向が強い。しかし、子供は本来固有色に捕らわれない豊かな色彩世界を持っている。それは子供の自由な心が、豊かな精神世界となって表れるからである。最初の問いに関しては、保育者自身が既成概念に捕らわれている事を自覚し、その点を踏まえ子供の指導・援助について考えようとする姿勢が先ず共感できた。前述したように、大部分の大人は常識的な物差しの中からなかなか抜け出すことが出来ないでいる。それは大人の絵画指導の面から見ても、固有色に捕らわれ単調な色の塗り分けになってしまう例が多いことから、窺い知ることが出来る。しかし、木の緑一つ取ってみても、その種類や成長過程で千差万別の緑の色が存在する。原色の緑という概念だけでは表現しきれないのである。そう言った身の回りの環境の複雑微妙で豊かな世界を感じ取る感受性だけでも、保育者は培う必要があると考える。子供は持っている絵の具・クレヨン・クレパスの中から好きな色、若しくはその時の

気持ちに合った色を選んで、自己の心を無意識に物に託して表現する。物事に捕られない、自由な精神を持つ子供の表現活動を援助・指導するには、先ず保育者自身が豊かな感受性を身につけるよう努力することが必要である。そうすることで子供の表現の美しさ豊かさを心から理解し感受できるであろう。保育者が子供の表現に共鳴・感動する心を持てば、それは自然に子供の心に伝わりより自主的で活発な表現活動に繋がっていくだろう。

色のとらえ方に関する発達段階に応じた指導・援助については、未満児はクレヨン・クレパス・マーカー・色鉛筆など他の用具を必要としない彩色材で、スクリブルを十分に体験させることが大切である。この体験で自然に色の感性が養われるであろう。三歳児にはクレヨンなどの代わりに水彩絵の具で“ぬたくり”を体験させると良い。クレヨンなどと違い、水彩絵の具は混色のバリエーションに富み“ぬたくり”の過程で多様な色彩の変化を体験することが出来るだろう。年中・年長児については、日々の造形遊びの中で、子供の表現を保育者が理解し受け止めることによって、精神的安定感の中で伸び伸びとした表現活動を繰り返し、豊かで広がりのある表現になるであろう。発達に関係なく色水遊び・ぬたくり・マーブリング・デカルコマニー・ドリッピング・ビー玉ころがし・スタンプング・コラージュなどを繰り返し取り入れるとより効果が上がる。

以上述べたことは、色彩表現のみならず絵画製作の表現全般に必要な事項である。

次に色作りについての質問であるが、限られた時間内での活動では色作りも含め、保育者が予め用意しなければならない事が多いことは理解できるし、また実際必要であろう。だが絵の表現活動では、イメージした世界を表現するために自ら好きな色を選びチューブから出す行為は、必要不可欠である。またどのような事も経験を積み重

ねることによって可知となる。保育者はケースバイケースで対応しなければならない。質問の中で子供が色作りすると色遊びになってしまうたり、時間がかかり過ぎる事が問題として挙げられていたが、保育者が想定しない自主的な遊びが広がっていくことも活動の中では当然考えられる。時にはそれを受け入れる姿勢が大切である。その事が主体的活動を助長し、スムーズに発達を促し、次の造形活動の展開にも繋がって行くだろう。また単色の色使いしかしない子供に対しての質問もあったが、単色しか使わない子供の中には、その色が一番好きだからという子もいるであろう。好きな色があるということは、自己主張と認め、単色の中で変化させるように援助（他の色を混色して色を変化させたりする）すると良い。保育者が用意する場合の色数であるが、未満児・年少児などは三原色プラス無彩色と子供が好む色（ピンク・緑など）を用意すれば良いであろう。年中・年長児については、色の三原色と無彩色を用意し、混色することで様々な色が出来る事を体験させることが大切である。その他混色で作りにくいと思われる色があれば用意しておいても良い。

結論として大切なことは、色作りの楽しさを子供たちに体験させることである。しかし、色作りだけを取り上げて考えるのではなく、日頃の保育の中で季節の移り変わりの色の変化など、日常環境での色の美しさや変化を保育者が語りかけ、子供の感受性を高めることも大切である。その結果、色彩表現も生き生きとしてくる。

質問 - 2 (江吉良保育園)

絵の好きな子にするには、どうしたらよいか。

回答及び考察

子供の中には必ず「お絵描きが嫌い」という子がいる。それはその子供が絵を描くことが嫌いと言うより、苦手意識を抱いて

いる為に自信をなくしていることが“嫌い”という言葉になるのである。特に4歳頃になると子供は上手・下手を意識するようになる。この時期、保育者は個々の子供の多様性を認め、一括りに上手という言葉で子供の表現を認めることをしないで、個々の子供の表現の特徴を読み取り、その子に合った言葉掛け（優しい絵ね・元気・強そう・可愛い・明るいなど）を心がける必要がある。そのためには、日々の保育の中で保育者がそれぞれの子供の特性をしっかりと把握する努力をしなければならない。すでに苦手意識を持っている子供に対しては、具体的描画表現を伴わない（スタンプングや絵描き遊びなど）誰でもができる造形遊びを十分に体験させると良い。造形遊びの過程で偶然にできた色や形に興味や関心が湧き、自然と表現活動に対する自信も備わってくるであろう。また、好きな時に自由に描ける環境を設けておく事も動機付けとしては効果的である。

質問-3 (正木南部保育園)

色使い描き方など、絵全体の表現が保育士からみて、気になる子供の心理状態をどう見たらよいのか。また、講師から見た気になる絵（絵から見ると良くない心理状態）とは？ どういうものか。

回答及び考察

子供の絵による心理分析は確かに存在するが、専門家ではなく保育者の立場からそ

の表現のパターンを類型化することは、却って偏った保育になる危険性を含んでいる。幼児の絵の場合は、精神の発散行為にもなっているため、その時々のお気持ちの変化がストレートに表れる。保育者の立場としては長期的に子供の生活や表現を把握し、明らかに問題があると感じた時には、家庭と連携して問題の解決にあたる必要がある。また極端に問題があると感じるケースの場合は、専門家に相談することが望ましい。(図-5、図-6)

第三回保育研究会 (99年12月2日)

会場：小熊保育園

質問-1 (桑原保育園)

色々な体験をさせても、絵を描くといつも同じパターンの絵になってしまう子の指導はどうしたらよいのか。(年少児)

保育士の子供の絵を見る目を高めるために参考になる絵を見せてほしい。

回答及び考察

何時も同じパターンの表現になってしまう子供の指導についての問いであるが、この質問の対象年齢がカタログ期(印象に残っていることを話し言葉のように画面に羅列する)にある年少児ということを見ると、発達段階から見てパターン化は自然な表現の表れと見ることが妥当であろう。保育者としては、結果に一喜一憂することなく個々の子供の適齢を見極めながら次ぎの段階に順調にステップ出来るよう辛抱強く援助す

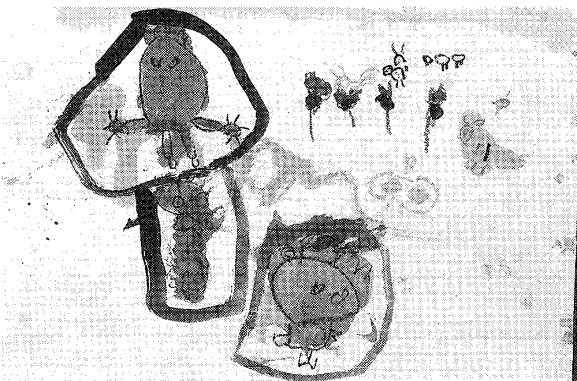


図-5 四歳(男) お父さんが別の部屋にいる

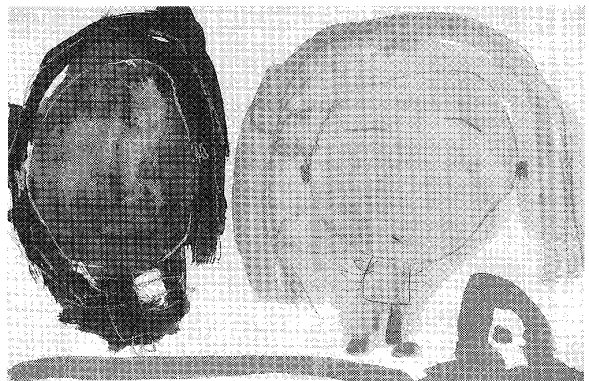


図-6 生れた弟を否定的表現(暗い寒色で表現)

る必要がある。その為には、子供の表現の発達過程を理解することが不可欠であろう。

子供の表現のパターン化に広がりをもたらす方法として、言葉掛け以外の具体的指導例を箇条書きにして記述する。

- a. ある一定の条件を画面上に設定し、そこからイメージを発展させると同じパターンの繰り返しを避けることが可能である。具体例としては、アルファベット・平仮名・図形(円・ジグザグ線)などを大きく画面に描かせ、そこから連想する世界を表現させる。
- b. ローラー遊びやドリッピング、転がし絵などで遊んだ後の偶発的な画面からイメージを膨らませ、連想した世界を描き加えて表現する。(図-7)
- c. 新聞破りで遊んだ後の紙片から色々な形を連想するゲームをし、その紙片を色画用紙などに貼り描き加えてイメージを広げる。
- d. テーマの設定を工夫する。(例えば赤いものとテーマを設定し、みんなで発表したものをそれぞれが表現する。りんご・いちご・ポスト・消防車・夕焼け)

上記の具体例は、イメージを膨らませる想像の系の段階において、それぞれのイメージの広がりを助長し、表現意欲を引出すための手段としては効果的と考える。

保育者の子供の絵を見る目を高めるための参考作品としては、子供の絵の他に子供の純真且つ奔放な表現から触発された巨匠(クレー・デュビュッフェ・ピカソ)の作

品を紹介した。保育者としては巨匠たちの作品に内在する精神が、子供の絵と出会ったことによって画家の心を解き放ち、新たな表現の可能性を切り開いたという歴史を知ることが重要であると考えた。こうした認識が、常識的な価値観で子供の絵を評価することなく、心の表現の大切さとその多様性を受け止める許容力を育み、しなやかで柔軟性のある援助・指導が行える保育者としての資質を培うのではないかと考えている。(図-8)

「私は子供たちのように、純真に描くことを覚えるのに何年も苦勞した。」(ピカソ)

この言葉の持つ深い意味合いを大人はもう一度考える必要がある。

質問-2 (桜花保育園)

画用紙に小さく描くだけで「できた」という子に対して、どのように指導・援助すると大きく描かせることが出来るか。また、絵の具でバックを色塗りするときの指導や援助はどのようにしたらよいか。

回答及び考察

幼児の場合どのような活動を行っても、年齢差はあるが集中できる時間は20分から30分位である。しかし、その中でも集中力の持続時間が極端に短い子も何人かは必ずいる。質問にあるように直ぐ「できた」と言って、保育者を戸惑わせるケースは日常茶飯事であろう。この場合、保育者の言葉掛けによって表現意欲を引出していくこと

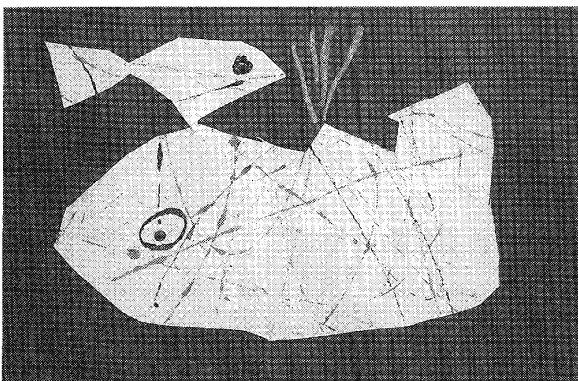


図-7 転がし絵からの表現



図-8 クレー

が先ず大切である。「できた」という絵を前にして子供とよく対話し、興味や関心を聞き出し自然に意欲を引出すように言葉掛けする必要がある(もっと強そうに・他に友達はいないの・次に好きなものは何)。またこの質問では直ぐ「できた」という子供の絵を「小さく描く」という言葉で表しているが、当然子供の中には性格的に小さく表現する子もいるはずである。そのことについては、個々の子供の表現として受け止めることが大切である。ここで問題なのは小さく描くということより、簡単に終わってしまうことについてであろう。

大きく描かせることについての問いであるが、前述したように性格によって表現に違いができるのは当然である。ただ大きな画面で闊達に表現活動することは、子供のストレスを発散させ、新たな表現を獲得する可能性も開かれる。画用紙の隅や真ん中に自己の世界を小さく描いていた子供も、大きな紙や筆・刷毛または指や手などを使って、大きなストロークで活動する快感を体験することで、欲求を満ちし表現の幅も広がって行くであろう。その他技術的な方法であるが、細長い紙や極小の紙で描くことも画面全体を使うことを自然に体験し、自ら世界を広げていくだろう。主体的・自発的な活動になるように工夫することが、保育者の援助として重要なことである。

バックについての質問であるが、三～四歳頃の子供の絵は物に対する興味や関心から表現されており、本来バックの意識は無い。子供がただ空いた部分を塗り潰す無機的な行為だけなら、バックを描く必要は無いと考えている。しかし描かれた物に対する気持ちを高めるために、もっとそれらしく見えるようにバックを考えさせることは、描いた物に対する思い入れや表現を更に深めることになるだろう(例-楽しい感じ・暖かい感じ・涼しい感じなど描かれた物をより強く表現するためにバックを考える。点・線・模様など表現を楽しむ)。図式期に入ると子供の絵は、一枚の絵画的空間と

して表されるようになる。この時期の保育者の指導としては、バックという意識ではなく、そこには空が在り海が在り大地が在ると言う事を先ず認識した上で、描かれた絵に対する素直な子供の気持ちを前述の例えで示したような言葉掛けで引出すように援助することが大切である。バックはただ塗り潰すだけの余白ではなく、子供が思い描いた空間の一部なのである。

質問-3 (中島保育園)

絵を隠す子や描いた絵の上から黒く塗りつぶす子の指導はどうしたらよいか。

回答及び考察

前述したように、上手下手の意識は凡そ四歳頃から芽生えたと考えられる。この事から絵を隠すという行為は自分の絵に自信が無いのか、若しくは内向的性格からくるものであろう。保育者の関わり方としては、基本的には褒め言葉に尽きるが、その言葉もその子供の長所や短所を読み取りその上での言葉掛けが必要である。認められることによって、子供は自信を持ち表現意欲も高まり、内向性も改まっていくものと考えられる。

黒く塗り潰す子供の場合、そのことを問い詰めるのではなく、なぜ黒くなったのか対話し、子供の気持ちを聞き出すことが大切である(例-最初の絵が隠れたね、いなくなったね、などさり気なく心の思いを引出す)。その他考えられる原因としては、活動時間がその子供にとっては長すぎるため、集中力を欠く結果塗り潰す行為になってしまう場合も考えられる。十分に描き切ったと判断した場合は、新しい用紙を与えるなどして新なる意欲を呼び起こすと良い。

質問-4 (掘津保育園)

この頃、題に合った絵を伸び伸びと描く子とまだなぐりがきのような絵を描く子の差がはっきり分かるようになってきた。その子なりに「こんなイメージだ」と言っ

ているのだが実際画用紙に描くとなぐりがきになってしまう。もっとはっきり描くには、どのように導入したらよいか。

また保護者が見たとき、どうしても伸び伸びと描く子供と比べてしまい何か物足りないようである。保育士としては、「一生懸命描いたんですよ」とお話しするのだが…もっとよい説明の仕方はないか。(年中児)

回答及び考察

幼児の絵の発達段階はその成育歴や描画経験によって当然個人差が出る。しかしその発達過程は、人種・宗教・文化の違いに関係なく必ず同じ道筋を通る。この質問もなぐりがき期から覚えがき期までの表現が、渾然一体となっている現状に戸惑いを感じている多くの保育者の気持ちを代弁した問いかけであろう。特に年少・年中児は発達過程の差が最も変化に富んだ時期でもあるため、質問にあるような状況はよく見受けられる。このような時期にある子供の指導・援助は、活動の内容を幅広く柔軟に考える必要がある。具体的に述べれば、題を設定した絵の他に、ジグザグ線・渦巻き線・点結び・噴水線などの絵描き遊びでクレパスや筆などの使い方を学習し、紙版画・スチレン版画などの版画遊びでは、描画によらない表現の面白さ、刷り上がったときの不思議さや驚きなどを体感する。またスタンピング・デカルコマニー・マーブリングなどの造形遊びによって、色や形に対する感性や表現する興味・関心・意欲を引出す。以上の造形活動を随時取り入れ、得手不得手のない造形遊びの体験を十分に積ませることによって、素材に慣れ親しみ感性も培われ指・手・腕などの発達も促され、順調に次の段階へ進んで行くであろう。

最後に、保護者への対応に付いてであるが、前述したように他の子供と比べる必要はない。有るがままの子供の表現を受け止める姿勢が大切であることを伝えることも、子育て支援の一環として保育者の大切な職

務と考える。

おわりに

保育会から頂いた質問を改めて読み返し、論考する過程で強く感じたことは、保育士の方々の造形活動に対する援助・指導に関する探究心の高さであった。これは、言い換えれば日常の保育の中で造形活動が重要な位置を占めているということであろう。私自身、造形表現は拡散的思考(正解答が幾通りもある)の中に在り、個々の独自性と自主性を最も大切なこととしていることから、幼稚園教育要領・保育指針の理念と合致し、更に幼児期の心身の発達を順調に促すには必要不可欠であり、且つ有効的な活動であると考えている。

質問の端々からは、造形活動の必要性を身近なものと感じ、子供一人一人の気持ちや発育に合った援助を目指そうとする熱意と誠実さが伝わってきた。回答については、理想論に止まること無く出来る限り具体的・実践的内容にすることを心掛けた。しかし、保育士の方々の熱意に応えるべき内容になっていたか甚だ疑問が残っている。今後は、保育現場との連携を一層強化した実践的研究を進める必要性を養成校の教員として痛感した。

最後に貴重な経験の場と質問を提供して頂いた、羽島市保育会の方々に心から感謝の意を表しこの拙論を捧げます。

参考文献

- 造形美術教育体系1 幼児教育編(1982年 美術出版社)
- 幼稚園教育要領
- 保育指針
- 質問状
- 羽島市保育会
- 参考作品写真
- アートギャラリー現代の美術13 クレー(1985年 集英社)
- 若杉造形教室